

令和3年度 学 校 評 価 報 告

草加市立瀬崎中学校

(令和4年1月25日作成)

1 学校教育目標	3 前年度の成果と課題
<p>自らの生き方を考え、実践する生徒の育成『よりよく生きる』 「ま」…学び続ける生徒 「つ」…強い体をもつ生徒 「な」…仲間を思いやる優しい心をもつ生徒 「み」…みんな仲良く笑顔あふれる生徒 「き」…希望をもち夢に向かって努力する生徒</p>	
2 重点目標・努力目標	3 前年度の成果と課題
<p>1 わかる・できる・伸びる授業を展開し、基礎学力の定着を図り、学力の向上に努める。 ①「授業の5原則」と「学力向上5つの対策」の徹底 ②「学習形態の工夫、ICTの活用」 ③「自己肯定感・自己有用感を育む授業の展開」 ④「特別支援教育の視点・支援の具体化」 2 不登校、いじめ問題の未然防止、根絶を目指す取組、道徳教育と教育相談体制の確立 3 瀬崎中学校区幼保小中・地域・家庭で連携し、安心で安全な学校づくりに努める。 4 学習環境を整備し、安全で落ち着いた環境づくりに努める。 学習の場にふさわしい掲示・言語環境づくりときれいで使いやすい学校づくりに努める。 5 家庭・地域と連携を密にし、期待に応えられる学校づくりを推進する。 信頼関係をさらに構築し、開かれた学校づくりを進めていく。</p>	<p>成果</p> <p>○全教職員が「自らの生き方を考え、実践する生徒の育成」を目指し、計画的な自主・教科別研修に取り組むことができ、常に授業改善等でよりよくしていこうという意識を持つ、そして課題解決能力を身につけ、目指す学校像・生徒像に向けて取り組むことができた。</p> <p>○「基礎・基本」の定着を目指し、長期休業中や定期試験前の補充学習、3教科によるコンテスト実施による基礎学力の向上、予習・復習等の家庭学習の習慣の確立、毎時間のドリル学習を行い成果が上がってきている。特に草加市・埼玉県(全国)学力学習状況調査結果から学習に伸びが見られ、学力の向上が図れることができた。</p> <p>○教職員による朝の立哨指導を含めた「健康観察」並びに保護者による「愛の一声運動」(あいさつ運動)を計画的に実施するできた</p> <p>○生徒、保護者、地域のとの信頼関係がさらに構築され、よりよく生きるための教育活動を実践することができた。(学校の各種行事やHPや各種便りなどの情報配信メールの活用等)。</p> <p>課題</p> <p>○学力の向上については、今後も学校としての最重要課題として捉えていきたい。研究主題でもある「自己肯定感や自己有用感を育む」教育の実践を通して、「幼保小中一貫」を意識した連携をより一層深め、15ヶ年の学びのカリキュラムを実践していきたい。</p> <p>・生徒指導について、授業規律の確立を通して生徒同士、生徒と教職員との関係も年々向上し、信頼関係が築きあげられた。生徒に寄り添い、生徒の自主自律のための支援をしていく。</p> <p>●全体的に生徒は積極的にあいさつがよくできてはいるが、正しい言葉遣いを含めて、あいさつを徹底していかなければならない。教職員が積極的に声掛けや挨拶の手本を示し、さらに部活動等で対外的な場面において、指導が必要である。</p> <p>●体力向上について、下がっている傾向がみられたので、どのような状況下でも自ら体を積極的に動かし、体力向上に努めることができるよう、意識の醸成を促していく</p> <p>●学校公開や三者面談の中止により、保護者が生徒の学校での様子や保護者からご家庭での様子を伝えたりするなどの相談することができなかったことから、コロナ禍の状況にもよるが、WEBを活用するなど工夫して実施していけるように努めていく。</p>

4 評価表 ※評価基準 [A:十分達成している B:おおむね達成している C:やや不十分である D:不十分である]				
領域	評価項目	評価の観点	評価	成果と課題 ○成果 ●課題
I 学校運営に関するもの	①組織運営	<ul style="list-style-type: none"> 学校経営目標、方針 校務分掌組織 適所への適材配置 職員会議等の運営 予算の執行・決算、監査等 	B	<p>○学校経営目標と方針の徹底のために、朝の立哨指導での健康観察徹底による朝の打合せ等ができない中、校支援システムまた臨時の打合せ柔軟に対応し教職員に周知事項の徹底を図ることができた。また定期的に運営委員会、学年会を実施でき、先生方の意見や意向を吸い上げやすい環境づくりをすることができた。</p> <p>○校務分掌組織を精選し、教職員の適材適所への配置を意識して行い、効率的な運営ができるようになってきた。</p> <p>○会議時間の減少のために、事前に資料を配布しておく、校支援で事前に質問・意見事項を募ることで提案者が事前に訂正し、意見や質問に対する回答を検討しおけるようになったことで会議運営時間の短縮につなげることができた。</p> <p>○小中連携して、研究主題実現にむけた授業改善やWEBを利用した研究発表会を実施することができた。</p> <p>●小中連携について、コロナ禍でほとんどの行事が中止となったが、部活動公開など少しずつ再会できている。しかし地域の交流行事等は実施できなかった。</p> <p>●さらに校務分掌の精選に取り組み、効率的な運営とともに業務改善に取り組んでいく。</p>
	②研究・研修	<ul style="list-style-type: none"> 研究組織、計画、実施 校内研修の推進 授業改善への取組 校外研修会への参加 人材育成 	B	<p>○研究主題にむけて、授業改善を通して自己肯定感と自己有用感を育むことを通して、「学力の向上」について、授業改善に各教科で研修を行うだけでなく、小学校と連携して研究推進を深めることができた。</p> <p>○WEB授業配信やオンライン会議の推進を積極的に行うことができた。</p>
	③保健管理・安全管理	<ul style="list-style-type: none"> 保健計画、安全計画 環境衛生の管理 健康観察、安全点検 緊急事態発生時の対応 危機管理マニュアルの作成・活用 	A	<p>○保健計画、安全計画をもとに、保健指導及び安全教育の充実を推進した。</p> <p>○今年度も毎月定期発行の「保健」「給食」だよりで保護者への啓発を行った。</p> <p>○危機管理マニュアルを更新した。また、管理職と教職員で毎日安全点検を確実にし、組織全体で対応するなど、適切に管理することができた。</p> <p>○通学路安全の見直しについて、学校運営協議委員、PTA役員と協力して実施することができた。</p> <p>○健康観察は教職員全員で立哨指導とともに生徒一人ひとり丁寧にすることができた。</p>
	④情報管理・施設設備管理	<ul style="list-style-type: none"> 個人情報の管理、保護 施設設備の管理と有効利用 	A	<p>○個人情報持ち出し簿などの保管簿、校内規定の遵守の他、教頭だよりの定期的な発行（週1回程度）を通して教職員事故に対する教職員の意識の醸成を図り、未然防止に努めることができた。</p>

<p>⑤地域との連携 開かれた学校</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校情報の発信 ・学校公開の実施 ・学校運営協議会の推進 ・地域、校種間連携 ・PTA活動の活性化 	A	<p>○地域や県内における不審者発生状況等について、学校スマイルメール配信を迅速に行い、注意喚起をし、警察や近隣の小学校と連携することで、地域全体で子供たちを見守る環境を作ることができた。</p> <p>○毎月発行「学校だより」は保護者と地域（民生委員、町内会等）に定期的に配布することができ、学校教育に対する理解と協力をいただくことができた。</p> <p>○学校運営協議委員は現状報告だけでなく、学校運営に関すること、地域として学校にどのようにかかわっていくか、学校運営の課題や希望など、などさまざまなご意見をいただくことで、協力して学校経営・運営にとりくむことができた。</p> <p>○学校評価等のアンケート等、スマイルメールやホームページを利用し電子集計システムを導入し、集計が迅速になったことで、よりスムーズに直接的に学校運営に意見を反映させやすくなった。</p> <p>○PTA運営委員会等役員との会議はコロナ禍で途中開催できないときがあったが、役員との連携を密にすることによって、保護者と連携して学校教育を進めることができた。</p>
<p>⑥幼保小中を一貫した教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・目指す子ども像の共有 ・15年間を通じたカリキュラムの編成 ・一貫教育推進のための組織づくり 	B	<p>○瀬崎中学校区として目指す子ども像の共有を校区小学校と行った。小中一貫教育推進委員会を月1～2回実施し、小中学校それぞれの授業改善の取組や研究主題に係るアンケート形式の統一化等、研究発表（11月）にむけて研究主題や取組の共有、WEB会議等を行うことができた。</p> <p>○小中乗り入れ授業（保体）の取組強化により、中1ギャップの解消、教育相談の小中連携を図ることができ、小中間の情報交換や連携をよりいっそう深めることができた。</p> <p>○新入生保護者説明会をインターネット上で資料の提示、動画配信、質問受付等することができた。また地域の保育園避難訓練での立ち寄りなど幼保との連携が深めた。</p> <p>●コロナ感染防止のため、昨年度まで実施の運動会での合同演技や陸上競技大会前の合同練習など生徒、児童の交流が例年のように深めることができなかったが、感染拡大防止対策を実施し、部活動公開は実施することができた。。</p>

領域	評価項目	評価の観点	評価	成果と課題 ○成果 ●課題
II 教育活動に関するもの	①教育目標・教育計画	<ul style="list-style-type: none"> 15年間を通じたカリキュラムの編成、実施 教育計画の作成 教育活動の評価 目標、方針の周知 授業時数の配当、確保 	B	<p>○コロナ禍の状況は続く中ではあるが、授業時数の確保を確実にすることができた。特に教育計画・指導要領の各教科・領域の授業時数の確保を図ることができた。</p> <p>○学習指導要領の内容をもとに、学校の実態に応じて年間全体計画、指導計画も臨機応変に対応し、ほぼ予定通り実施することができた。</p> <p>●コロナ禍で計画を変更せざるを得ない状況が多くあり、計画通りにできた部分もあった。学級閉鎖や休校になったときを常に想定して、ICTやネット配信による授業を進め、生徒の学びをとめないよう策を今後も継続して行っていく。</p>
	②教科指導	<ul style="list-style-type: none"> 指導計画の立案 主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善 評価、評定の工夫 外部人材の活用 	B	<p>○自主研修や研究発表会にむけた指導改善に教職員全員が取りくみ、学力向上、自己肯定感・有用感の高揚に向け効果的に指導計画の立案、指導方法の改善・工夫に取り組んでいる。</p> <p>○授業を着実に進めることができた。</p> <p>○学習支援補助員を適切に配置し、不登校生徒の対応だけでなく、相談室との連携など学習効果を図ることができた。</p> <p>●コロナ禍で主体的・対話的で深い学びの実現のために、感染対策を十分にした上で言語活動や生徒同士のコミュニケーションを行ったが、足りていない。状況に応じて活発に行っていきたい。</p>
	③道徳教育	<ul style="list-style-type: none"> 全体計画の作成 各教科との関連 道徳的実践力の育成 家庭、地域社会との連携 いのちの教育の推進 	B	<p>○道徳部会を中心に教材選定や資料作りを行う中で道徳時数の完全実施を図るとともに、教科横断的な学習、各教科との関連を図り、生徒一人ひとりの道徳的実践力の向上を図ることができた。</p> <p>○ローテーション授業での実施や道徳ノートの活用による蓄積で生徒がわかりやすく学べるようになった。</p> <p>○ローテーション授業を進めることでスムーズに授業展開が可能となり、子どもの豊かな心を育成することができた。</p> <p>●扱う題材が実施時期にそぐわなかった時だけでなく、「いじめ」につながってしまうような題材もあったので、道徳的心情のみならず、実践力を育むことが大切である。</p> <p>●生徒の実態に応じて、全体計画、年間指導計画の見直しを図っていきたい。</p>

④特別活動	<ul style="list-style-type: none"> ・指導計画の立案 ・学級活動、学級経営 ・学校行事 ・生徒会活動 	B	<p>○学級経営は各学級経営計画のもと、計画的に実践することができた。</p> <p>○生徒会活動は、教師の支援を減らし、生徒の自主的な運営を心掛け、実践することができた。また、コロナ禍で各委員会での活動も積極的に行うことができ、学習環境の向上につなげることができた。</p> <p>○生徒会行事は様々な形に変更しながらすべて実施することができた。</p> <p>●コロナ禍で学校行事をオンラインで配信するなど工夫することはできたが、対面で実施することができなかった。行事の実施を望む声が多いため、引き続き感染症対策を取りながら企画・運営をしていく。</p> <p>●下級生が、様々な行事を経験することができたが、対面での実施をしておらず、進級後に対面時に再度指導が必要である。</p>
⑤「総合的な学習の時間」の指導	<ul style="list-style-type: none"> ・指導計画の立案 ・指導内容の充実 ・指導方法の工夫と改善 ・評価の工夫 ・地域の人材・物的資源の活用 	B	<p>○特色ある取組の一つである「性出会い学習」を通して、調べる・体験する・まとめる学習を実践させることができた。また、数少ない学校行事の中で成果を収めることができた。</p> <p>○オンラインでの実施をするなど実施形態を工夫することができた。</p> <p>●講師の都合、コロナ禍への配慮で、実施できなかった学年ができた。しかし、対面ではなくオンラインまたは紙面上で知識として学ぶことはできた。</p> <p>●行事計画の精選とともに、地域人材の活用、物的資源の活用を含めて年間指導計画に少しでも盛り込んでいくようにする。</p>
⑥生徒指導	<ul style="list-style-type: none"> ・組織的な生徒指導 ・問題行動への対処 ・教育相談、生徒理解 ・いじめ防止対策 ・保護者、地域、諸機関との連携 	A	<p>○生徒指導委員会を中心に学習規律の徹底を学校全体で取り組み、落ち着いた学習環境をつくりあげることができた。また、子どもを取り巻く時代や環境の変化（特にSNSによるトラブル）にも柔軟に対応し、教職員が一体となって報告・連絡・相談を密にし、適切に迅速に対応することができた。</p> <p>○学校全体で年初に生徒指導マニュアルの作成・徹底とともに、コロナ禍に応じた適切な対応ができた。また報・連・相の徹底と共通理解をさらに深める生徒指導であった。</p> <p>○保護者から、学校は落ち着いた環境であり、あいさつができ、生徒がきまりを守り、良さを認め合う、いじめ・不登校をなくす指導の充実について評価をいただいた。</p> <p>●依然アンケートでは、あいさつができ、きまりを守り、お互いを認め、いじめ、不登校をなくしてほしいなどの対応ができていないと意見を胸に、あいさつが活発な学校、いじめゼロを目指して取り組んでいく。</p>

<p>⑦キャリア教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・組織的なキャリア教育 ・指導方法の工夫と改善 ・啓発的経験の充実 ・進路情報の収集・活用 ・職場体験活動 	<p>B</p>	<p>○進路だよりを全学年に配布し、1・2年の段階からキャリア・進路を意識させることで学習意欲の向上や自己実現への取組につなげる指導をすることができた。</p> <p>○定期的に進路部会を開催することができ、最新の情報を共有することができた。</p> <p>●1・2年生でまだまだ進路のイメージがつかめていない生徒が多いので、進路だより配布だけでなく、3年生での進路をイメージできるように内容を精選し、イメージを高めていきたい。</p> <p>●職場体験（1年）、上級学校訪問（2年）は実施することができなかったが、昨年同様調べ学習等で補充することで成果をあげることができた。全学年通してキャリア教育を意識して、計画的に進めていくようにしたい。</p> <p>●私立の出願がネット出願が多くなり、見学会や説明会へ参加するよう、家庭への積極的な働きかけが大切である。</p>
<p>⑧特別支援教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画、支援計画 ・指導方法の工夫と改善 ・通常学級との交流 ・諸機関との連携 ・校内支援体制の整備 	<p>A</p>	<p>○通常学級で特別配慮を要する生徒や日本語が不安な生徒など柔軟に対応し、教育支援室と、相談室、SC、SSW等と協力して、組織的に対応することができた。特別支援教育について引き続き研修を深め、一人ひとりの発達段階や家庭環境等に応じた適切な支援をしていきたい。</p> <p>○教育相談部会で特別に支援が必要な生徒の一覧や個別カードを作成し、特別支援コーディネーターを中心に、情報の共有を行い、一人ひとりにあった支援方法を確認、実施することができた。</p> <p>●ボランティア等の活動の場がなかったので、コロナ禍が落ち着き再開できれば、生徒に主体的な活動の場となるようにしていきたい。</p>
<p>⑨学校図書館教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・指導計画、支援計画の作成 ・図書館補助員の活用 ・諸機関との連携 ・図書館の整備 ・図書館利用の工夫 	<p>A</p>	<p>○司書教諭と図書館司書による適切な整理がなされ、昼休みの貸し出しを積極的に行い、学年ごとに貸出曜日を決めておくなど、感染対策や消毒作業など充実した経営ができた。</p> <p>○図書館だよりの発行、季節・長期休業に即した蔵書コーナーの設置や掲示物の充実に取り組み、一人への貸し出し数を着実に増やすことができた。</p> <p>○空き教室を活用して、第二図書室を開設することで、各学年の授業等で手軽に生徒が本と触れ合う機会を増やすことができた。</p> <p>●生徒会予算でラミネーターを購入し、本の紹介をより充実させることで、貸し出し数、読書を増やせるようにしていく。</p>

<p>⑩情報教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教育計画の作成 ・校内研修の充実 ・ICT機器の積極的な活用 ・情報モラル教育の推進 	<p>B</p>	<p>○指導計画をもと、パソコンの扱い方及び情報モラル、セキュリティポリシー等について教職員全体で考える場面を増やすことができた。</p> <p>○タブレット使用が活発になり、行事でのライブ配信、学級閉鎖や登校できない生徒に対する授業配信を行うことができた。</p> <p>○学校内での取り扱いなどの指導を適切に行うことができた。</p> <p>●オンラインによる行事や授業の配信を増やせるように努力していく。</p> <p>●配信した動画は、加工や再配信されるリスクがあり、ライブ配信では授業に参加している生徒に配慮ができないなどの理由を伝達していく必要がある。</p> <p>●授業や校務において、ICT機器の積極的な活用を図ることができたが、今後の感染状況を踏まえて休校を想定してICT機器の活用をさらにすすめる、Zoomによる会議や授業の配信の活用を進める必要がある。</p>
<p>⑪人権教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全体計画の策定 ・各教科との関連 ・人権感覚の育成 ・校内研修の充実 	<p>B</p>	<p>○性の多様性、生徒指導との関連を深めた教員の理解を深めることができた。</p> <p>○計画的に社会の授業を中心に、「ビデオ視聴」や「被差別部落や差別等の資料」を通して人権に対する意識の高揚を図った。</p> <p>●コロナに感染した人や濃厚接触者に対する考え方、接し方について教育していく必要がある。あわせてSNS等による中傷被害等人権問題について、教科・領域の計画に含め、人権擁護の意識の醸成を図る。</p> <p>●いじめや不登校生徒に関する指導の在り方についてまだまだ課題があるので、研修を深めていく。</p>

領域	評価項目	評価の観点	評価	成果と課題 ○成果 ●課題
III 特色ある学校づくり	学力の向上	基礎・基本の充実 校内研修	B	<p>○各教科の小テスト、単元テスト、3教科コンテストを実施し、基礎学力の向上、基礎・基本の定着を目指すことができた。</p> <p>○自己有用感、自己肯定感を育む授業改善を全教員が自主研修を行ったことで、よりよく学力を向上させるための授業改善を進めることができた。</p> <p>○「授業の5原則」の徹底により、授業規律の確立が、学力の向上につながった。</p> <p>○幼保小中一貫教育を通して、校種移行時のスムーズな指導や躰き等の情報交換を行うと共に、「標準カリキュラム」の本校の実態に見合った改定により、系統性を持たせる授業が複数教科で実践することができた。</p> <p>●家庭学習の定着が徐々に凶られてきているので、小中の系統性をより考慮して継続していきたい。</p>
	基本的な生活習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ ・時間を守る ・学習環境の整備 ・授業の5原則 	A	<p>○「礼を正し」「場を清め」「時を守る」のさらなる定着が見られた。各学年「チャイム前着席」の確認を学級委員や生活委員といった生徒の自治運営組織づくりによって主体的に「よりよく生きる」ための方策を探って、実行することができた。また、効果的な掲示物等、学習環境の整備について意識して取り組むことができた。</p> <p>○授業の5原則が、どの教室にも掲示されておりユニバーサルデザイン化を図ることができた。(授業の用意・チャイム席・あいさつ・忘れ物・無駄話をしない)</p> <p>○「時間前行動」を意識した行動が図ることができたことにより、全校集会・学年集会・各行事等時間前には静かに整列することで落ち着いて行事に臨むことができた。</p>
	健康・体力	<ul style="list-style-type: none"> ・健康集会 ・部活動 ・性教育 	A	<p>○各学年「性出会い学習」等で命の大切さや健康に過ごすための意識を高めることができた。</p> <p>○コロナ禍で3年最後の運動部の大会は中止となったが、1・2年生の新人大会では、賞状を獲得するなど活躍した。また部活動を通して、体力の向上とともに豊かな心と健やかな体を育成することができた。</p>

5 総合評価（学校関係者評価を含む）

- コロナ禍ではあったが、学習活動の継続のために教職員で工夫を凝らし、全体的に学校経営・運営を円滑にすすめることができた。
- 教職員による朝の立哨指導を含めた「健康観察」並びに保護者による「愛の一声運動」（あいさつ運動・一部中止）を計画的に実施することができ、一人ひとりの生徒を全教職員で大切に見守り、あいさつや声掛けを丁寧に行うことができたので、今後も継続していく。
- 基礎学力向上にむけて、「基礎・基本」の定着のために、長期休業中や定期試験前の補充学習、3教科によるコンテスト実施による基礎学力の向上、予習・復習等の家庭学習の習慣の確立、毎時間のドリル学習を行い成果が上がってきている。さらに、コロナ禍で学校に登校できない生徒に対して、オンライン授業等で授業に参加できる形を整えることができた。
- 「性出会い学習」は、本校の特色ある教育活動であり、全学年で継続していく。コロナ禍でリモート実施となったが、命の大切さや人権教育に結び付ける成果を上げることができた。
- 教育環境面について、安心して安全な学校づくりや、授業規律の確立、生徒自身がルール・マナーを主体的に遵守し落ち着いた学習環境を整え、いじめのない、生徒同士がお互いによさや努力を尊重しあう人間関係、などの高い評価をいただくことができた。この評価を謙虚に受け止め、「よりよく生きる」生徒の育成のために、学校全体で取り組んでいくことが重要であると考えている。
- 教職員が他の学年の生徒の事もすべて自分の学校のこととして自覚し、授業改善等でよりよくしようという意識を持つこと、そして課題解決能力を身につけ、目指す学校像・生徒像に向けて取り組んでいきたい。
- 研究発表にむけた研究を通して、全教職員が「自らの生き方を考え、実践する生徒の育成」を目指し、計画的な自主・教科別研修に取り組むことができた。また幼保小中一貫教育の研究主題である自己肯定感、自己有用感を育む教育の推進を柱に、小中連携会議を積み上げることで、学校間・教職員間の情報共有だけでなく、積極的に連携することで各校の学校課題が整理できるようになるなど、取組の成果が出始めている。
- 生徒、保護者、地域との信頼関係がさらに構築され、コロナ禍で制約の中でも、よりよく生きるための教育活動を実践することができた。（学校の各種行事やHP情報や各種便りなどの情報配信メールの活用）
- 埼玉県・全国学力学習状況調査結果から学習の着実な伸びが見られ、学力の向上が図ることができた。今後も生徒の基礎学力の向上を通じた自己肯定感・自己有用感の高揚のために、校内組織で調査を分析し、より充実した学習環境を整備するよう、継続して取り組んでいきたい。

6 次年度の改善策

- 校内での取組
 - ・学力向上について、今後も学校としての最重要課題として捉えていきたい。研究発表会を終えたが、この経験を通して、研究主題「自己肯定感や自己有用感を育む」教育の実践をすすめ、より「幼保小中一貫」を意識した連携をより深められるよう、継続して15ヶ年の学びのカリキュラムを実践していきたい。
 - ・生徒指導について、授業規律の確立を通して生徒同士、生徒と教職員との関係も年々向上し、信頼関係が築きあげられている現状である。今後も一人ひとり丁寧に生徒に寄り添い、生徒の自主・自律のための教育支援を実践していく。そのためには、まず、授業改善に取り組む。特に、学校評価（保護者）で「教師は生徒の実態を理解し指導方法を工夫し、わかりやすい授業を行っている」、「教師は学力の定着を図る工夫をしている」が昨年度より高い評価をいただいた。教師は授業がすべてである。授業で生徒一人ひとりが全員活躍できることを通して、自己肯定感、自己有用感を育む指導力を発揮できること、そしてオンライン授業をさらに深めていくことで、生徒の実態に応じた、全員への公教育の実現を図ることができるよう、共通理解・共通行動を図り、自己実現につなげる生徒指導が図れるよう工夫・改善及び研修の取組をしていきたい。
- 校内研究組織を中心に組織全体で課題解決に取り組めるよう、一層の研修に励み、学校全体で推進していく。
- 昨年度の反省を踏まえ、コロナ禍での学校公開の仕方や三者面談形体の選択制（対面・オンライン）により、保護者が生徒の学校での様子や保護者からご家庭での様子を伝えたりするなどの昨年度よりはできたが、保護者の願や要望にお応えすることができなかった。特に、「学校の様子を保護者や地域に伝えていきますか」について、昨年度より評価は上がったが（+3.5%）担任と顔を合わせて話をすることの重要性を常々感じている。コロナ禍ではあるが、保護者と生徒の健康、安全を第一にして、家庭がよりよく判断して選択して開催できるように努めていく。
- 保護者評価「生徒は体力向上に向け、体育や部活動に意欲的ですか」について、おおよそ意欲的である（86.8%）が、昨年度より上がった（+1.7%）。コロナ禍において、分散登校や部活動停止、新人大会の中止等がある中で、家庭と学校が協力して運動等の活動に前向きに取り組ませた結果であると考えている。引き続き、どのような状況下でも自ら体を積極的に動かし、体力向上に努めることができるよう、意識の醸成を促していく。また本校独自の「健康体力集会」は、今年度も中止となったが、新体力テストの分析、本校の体力課題を踏まえた体育授業での補強運動の実施などを行っていくことで体力の向上、及び体力課題を解決するための方策を生徒自身が選択していけるように、指導をしていく。
- 全体的に生徒は積極的にあいさつがよくできてはいる（生徒評価95.9%、昨年比+3.7%）が、保護者は生徒が正しい言葉遣いを含めて、昨年度よりもできている（保護者評価86.7%、昨年比+3.5%）とまだまだ保護者と生徒の間に認識の差があることから、地域などの学校外においても、あいさつを自ら行うことを徹底していかなければならないと考えている。そのために、教職員自ら積極的に声掛けや挨拶の手本を示す、生徒会や学年「あいさつ運動」、部活動生徒による元気なあいさつの飛び交う学校づくりをするなど、さらに対外的な場面において、指導が重要であり、喫緊の課題である。

